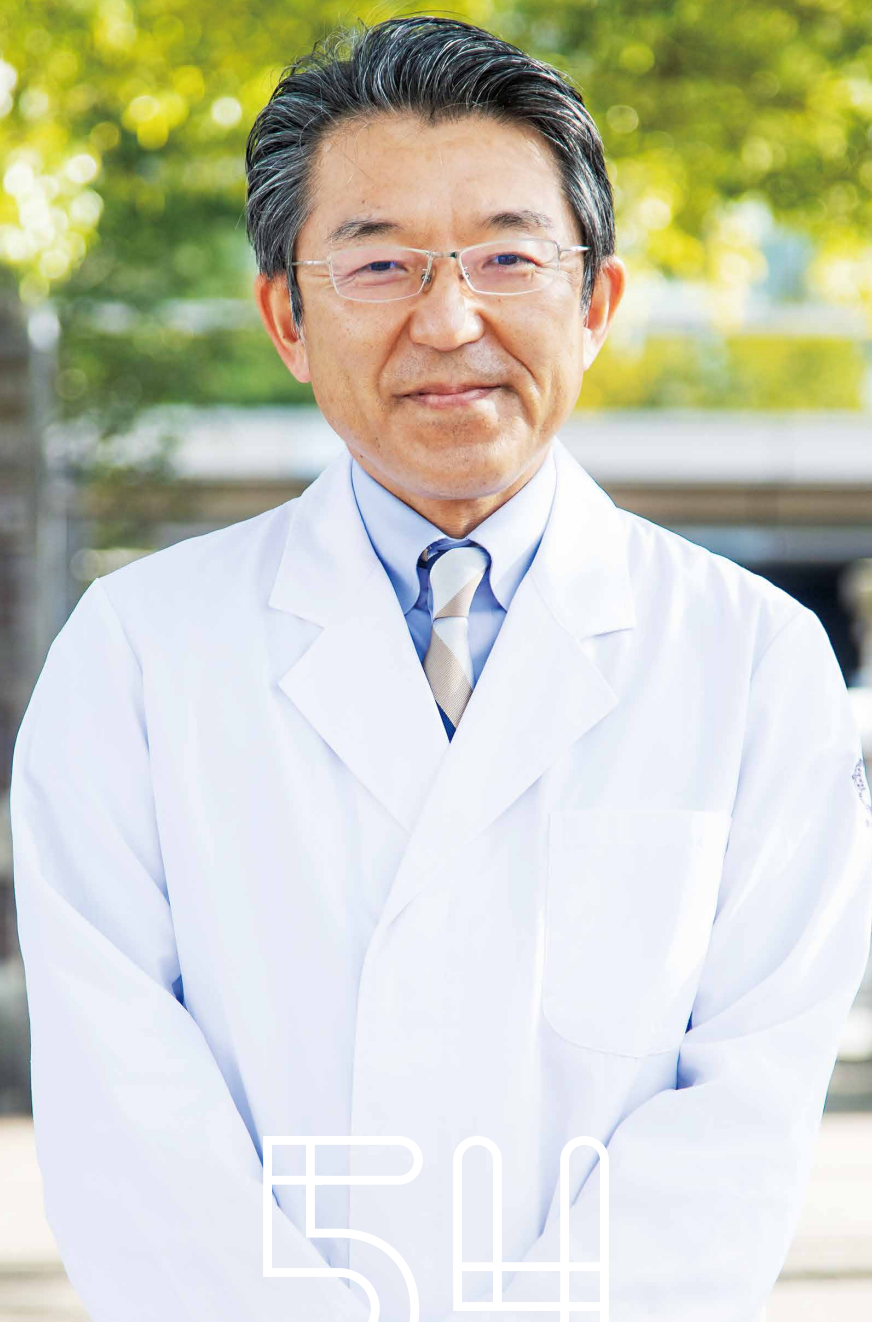


w i t h

東北大学病院 地域医療連携通信「ウィズ」



54

新体制紹介／地域医療連携協議会レポート

# 東北大学病院が 新体制へ 変わります



## 新病院長 張替 秀郎 はりがえ ひでお

1986年東北大学医学部卒業。東北大学医学部第二内科、米国ロックフェラー大学研究員などを経て、2007年に東北大学大学院医学系研究科血液免疫学分野教授に就任。東北大学病院副院長を経て2023年4月より現職。

2023年4月、張替秀郎病院長が就任し、新体制となりました。張替病院長から地域の医療機関の皆さまへご挨拶です。

### 顔の見える関係を大切に 緊密で開かれた 連携体制を目指します

2023年4月1日付で病院長に就任いたしました。皆さまには、日頃より東北大学病院に多大なご支援を賜り心より感謝と御礼を申し上げます。

当院は、「患者さんに優しい医療と先進医療との両立」という理念のもとに、安心・安全な高度医療を

提供するよう日々努力を続けております。しかしながら、昨今では、少子高齢化や医療ニーズの多様化、医師の働き方改革など、医療を取り巻く環境が目まぐるしく変化しています。このような時代にあつて、社会の変化に柔軟に対応しながら当院の責務を果たし、更なる飛躍を目指すためには、地域の先生方との迅速で円滑な連携体制がますます重要となります。

今年2月には、コロナ禍を経て、地域医療連携協議会を3年ぶりに対面で開催することができました。診療科の再編や個別化医療など、当院の診療に関する最新の情報をご紹介したほか、「連携医療機関から見た東北大学病院」と題して座談会を開催しました。多くの先生方にご参加いただき、忌憚のない

意見交換を行うことができましたこと、あらためて感謝を申し上げます。今年度も本会の更なる充実を図り、顔の見える関係を大切に、緊密で開かれた医療連携体制の構築に努めてまいります。

さらに今年度は、これまで電話やFAXで行っていた患者紹介手続きのデジタル化の検討を開始します。地域の先生方の負担を少しでも軽減し、患者さんにもスムーズに受診いただけるよう体制を整備するとともに、引き続き逆紹介も推進してまいります。

新体制のもと、職員一丸となつて、社会から信頼される病院であり続けられるよう病院運営に全力で取り組んでまいります。今後ともご支援とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

## 新執行部より地域の先生方へ一言ご挨拶



### 総括副院長 江草 宏

総括副院長ならびに歯科部門長として張替病院長新体制を支えてまいります。当院では「愛し(医と歯)の関係」をキャッチコピーに、医科と歯科の連携による高度な専門医療の提供に努めています。どうぞよろしくお願い申し上げます。



### 副院長 香取 幸夫

副院長として診療、医療安全、コンプライアンスを担当いたします。安全で患者さんに優しい医療を実践し、地域との連携を深めて、高度先進医療をはじめとする診療全般の充実に努めてまいります。



### 副院長 亀井 尚

副院長として経営、人事、広報戦略を担当いたします。COVID-19収束後の医療情勢と社会の要請を十分考慮しながら、東北大学病院の責務を果たしつつ健全な発展に力を尽くしてまいります。



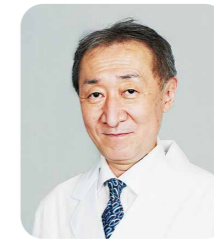
### 副院長 石岡 千加史

次世代医療の開発は国民が期待する当院の大きな役割の1つ。ゲノム情報や人工知能を活用した医薬品・医療機器を開発し、人に優しい未来型の個別化医療の開発・普及を加速させます。よろしくご挨拶申し上げます。



### 副院長 齋藤 正寛

歯科部門の副院長として経営、研究、産学連携を担当いたします。先端歯科医療技術の開発を中心に、口腔と全身疾患との関係を考慮した先進的な歯科医療を提供できる環境を構築してまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。



### 副院長 飯久保 正弘

医科歯科連携と歯科部門の教育、医療安全、感染対策、広報を担当いたします。患者さんへの安心・安全な歯科医療の提供と、医科歯科連携の更なる推進に尽力いたします。よろしくご挨拶申し上げます。



### 副院長 浦山 美輪

4月から経営・患者サービスを担当いたします。患者さんとご家族が、安心、安全に高度医療を受けられるよう、患者サービスの向上に取り組んでまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 地域医療連携センター長より



### 地域医療連携センター長 岡田 克典

2023年4月より地域医療連携センター長を務めます岡田克典(おかだよしのり/呼吸器外科)です。どうぞよろしくお願い申し上げます。地域医療連携センターは、地域医療機関からの紹介をスムーズに受け入れるための前方支援(新患予約など)、当院から地域の医療機関への紹介を行うための後方支援(退院支援など)を担います。センター内に、入退院センター(入院予定患者への説明など)や、医療(費)相談窓口、難病相談窓口などを含み、看護師や医療ソーシャルワーカー、

事務職など多職種のスタッフで、医療の質向上と患者さんの利便性向上を目指して日々業務に取り組んでいます。地域医療機関との連携・機能分化を目的として2006年に設立された地域医療連携協議会には県内を中心に1212施設にご加入いただき、毎年1回情報交換会を開催しています。2004年のセンター設立以来、初代センター長の佐々木巖先生、2代目の海野倫明先生、3代目の青木正志先生と代を重ねるに従ってスタッフも増え、支援内容も充実してまいりました。今後とも皆さまに親しみを持たれ信頼される東北大学病院を目指しますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

# 地域医療連携協議会

東北大学病院に関連する医療機関との連携を密にすることにより、医療機関との機能分化を促進し、医療の質の向上に寄与することを目的として2006年に設立された東北大学病院地域医療連携協議会。新型コロナウイルス感染拡大の影響で3年ぶりとなった第16回協議会が2023年2月7日、江陽グランドホテル5階鳳凰（ほうおう）の間で開かれ、当院の科長・センター長から情報提供を行ったほか、初めての企画として連携医療施設の院長との座談会を行いました。



## 新型コロナウイルスに対し 医療関係者の協働・連携で 実現した地域感染制御活動

初めに富永悌二病院長のあいさつで開会し、宮城県医師会の佐藤和宏会長、仙台市医師会の安藤健二郎会長から来賓のごあいさつを頂きました。佐藤会長は「3年前のこの会で、コロナ感染症は国難になるかもしれないと発言したことを覚えていますが、宮城県においては東日本大震災以来の医療関係者の協

働や連携があり、東北大学病院の果たした役割は極めて大きかった」と話し、医療人への感謝を伝えました。安藤会長は「対面での会議はとても大事だと改めて感じています」とした上で、仙台医療圏4病院の再編統合についての懸念点を述べ、「高度急性期の治療を終えた患者さんをどういうふうに関の回復期の病院に移すか、宮城県、仙台市と長い目で協議していきたい」と、東北大学病院の役割に期待を寄せました。

東北大学病院からの情報提供として、まずは総合地域医療教育支

援部の石井正部長から東北大学病院のCOVID-19地域感染制御活動について報告がありました。当院では、予防においては「東北大学大規模ワクチン接種センター」、検査に関しては「ドライブスルー型PCR検査外来」「コロナ陽性者外来アセスメント」、入院調整として「宮城県新型コロナウイルス感染症医療調整本部の主導」、そして診療としては「重症者を中心とした入院受け入れ」「軽症者宿泊療養施設の支援」「Long COVID 外来」「高齢者施設支援」「宮城県抗体カク

テル療法センター」「東北大学病院小児点滴センター」などの地域感染制御活動を担ってきました。

こうした活動を可能とする体制の確立維持のために、マンパワーの継続的確保を図り、安全で効率的な運用体制を心がけました。そこには、出務を病院業務としたり、ホテル入所者に当院の患者IDを発行したり、ドライブスルーやワクチン接種センターなどの一時的な施設を東北大学診療所という形で設置したりといった工夫がありました。それらを可能とした要因として、石井部長は「病院長のリーダーシップ、大学本部の理解、病院事務の下支え、各部署・各診療科の支援、行政との強い連携関係」を挙げました。

## 国の方針や制度改革に伴う 新たなセンターの設置と 診療科再編について

続いて、富永病院長は脳卒中・心臓病等総合支援センター設置について紹介。脳卒中・循環器病対策基本法の中に、患者さんおよび関係者の支援を推進することがうたわれており、厚生労働省のモデル事業として全国12の施設が選定され、東北大学病院にも脳卒中・心臓病等総合支援センターが設置されました。2022年度は、相談支



援窓口の設置、地域住民への情報提供・普及啓発、医療従事者を対象とした研修会・勉強会、相談支援を効率的に行う資材の開発・提供を行ってきました。

効率的な総合支援を行っていくためには、多職種から構成されるサポートチームを運用していくことが重要で、脳卒中療養相談士、心不全療養指導士などの育成が必要になってきます。アドバンス・ケア・プランニングへの対応、病院内の両立支援コーディネーターの育成、ハローワークおよび社会保険労務士との連携による治療と仕事の両立支援・就労支援、小慢さぼーとせんたーや自治体、他病院の相談支援センターとの連携も欠かせません。「医師だけではできないので、多職種が連携して困っている患者さんやご家族の相談に乗ろうというのがこのセンターの趣旨ですので、ご活用よろしくお願いします」と富永病院長は呼びかけました。

張替秀郎副病院長からは4月の診療科再編について説明がありました。腎・高血圧・内分泌科は腎臓・高血圧内科に、糖尿病代謝科は糖尿病代謝・内分泌内科となります。新専門医制度において糖尿病・内分泌専門医がサブスペシャリティの資格となっていることが大きなきっかけですが、研究・診療の近接性からすでに多くの大学が糖尿病・

内分泌で講座を構成しており、拠点病院でも基本的に糖尿病・内分泌でくくられています。「医師のキャリア、人材育成、地域医療の貢献を考えても、

再編すべきタイミングにありました」と張替副病院長。

さらに、内部障害リハビリテーション科、肢体不自由リハビリテーション科はリハビリテーション科に統合されます。リハビリテーションの領域も新専門医制度においてはリハビリテーション科として一つになっており、人材育成の面でも妥当と考えます。メリットは医師の専門医教育が一括して行えるため、専攻医希望者が医局を迷わず効率的に教育ができること、1人のリハビリテーション部長による統括運営ができること。将来的に院内の全てのリハ処方をリハビリテーションで行うことへの道筋となります。（詳細はP9）

続いて、個別化医療センターの活動状況について、石岡千加史がんセンター長が発表しました。個別化医療センターは従来の疾病体系を細分化し、再編化する次世代、未来型の医療で、東北大学病院ではみんなのみらい基金を基に2017年に設置されました。同年には当院に未来型医療創生センターが設置され、その研究開発プロジェクトの入り口となっています。一番重要な機能は検体の収集で、すでに多くの診療科研究者が疾病バイオバンクの検体を利用して開発研究に取り組んでいます。

また、当院は全国12のがんゲノム医療中核拠点病院の一つに指定され、がんゲノム医療を保険医療として実践しています。その際、個別化医療センターが中心となって保健診療で行う遺伝子パネル検査で診断した遺伝情報を、実際にどういった意味があるのか、どういう薬にひも付けることができるかを専門医療従事者のエキスパートパネルで解析し、その診断結果を各医



療結果に返しており、患者さんの診療に使われています。石岡センター長は「最近では月100件以上上っていますが、地域格差、医療圏格差が課題となっております、東北における普及啓発、均霑(きんてん)化に努めていきます」と抱負を述べました。

### 次世代放射線治療装置の導入 睡眠医療センター開設による効果とこれからへの期待

5番目の発表は、昨年2月28日に導入した次世代放射線治療装置MRリニアック「Elekta Unity (エレクタ ユニティ、以下ユニティ)」について、神宮啓一放射線治療科長が紹介しました。ユニティは1.5テスラの高磁場のMRIとエクス線装置リニアックが融合したもので、特徴は大きく3つ。「1.5テスラMRIにより明瞭な画像が取得でき、正確な位置合わせができること。その日その場で撮ったMRI上で治療計画を設計し直せること。照射中ほぼリアルタイムでMRIの画像が取得できるため、治療中腫瘍の位置ずれが起こった際に補正して周囲の被ばくを極力減らせることです。」放射線治療科は年間1200人のがん患者さんを治療していますが、疾患によっては2カ月かかっていた治療が10日で終わり、患者さんが普段の生活を送りながら治療で

きる非常に有効な治療装置となっています。これまで主に前立腺がんの患者さんに適用しており、すでに120人の患者さんの治療が完遂。そのほか、膵臓(すいぞう)がん、肝臓がん、腎臓

がん、オリゴメタスタシスなど軟部組織の転移を中心に活用しており、患者さんの満足度も高い治療です。最後は、2020年10月に設立された睡眠医療センターについて、小川浩正センター長が発表しました。近年、睡眠に対する患者さんの興味が高まり、診療面においても高血圧や心不全、糖尿病、緑内障、認知症、周術期の呼吸管理など、各医療分野において睡眠呼吸障害が非常に重要なファクターだと分かかってきており、注目が高まっています。睡眠医療センターは睡眠呼吸障害、中枢性過眠症、睡眠時随伴症、睡眠関連運動障害などを診断し、適切な治療方法を提案し、外科療法、呼吸療法、薬物療法、歯科療法に橋渡しをする役割を果たしています。

「終夜の睡眠ポリグラフィーと反復睡眠潜時試験を中心に、今後さまざまな特殊検査も取り入れて精度の高い睡眠診断を行っていきたい」と小川センター長。4月に外来窓口、外来検査室が立ち上がり、これまで脳波検査室で行っていた検査をいつでも行える形になります。地域医療連携も進めていきたい考えで、「眠れない、眠り過ぎる、眠る時間帯の異常、眠っている間の異常といった症状を治療しているが改善しない、他の治療法はないかという際はご紹介いただければ」と案内しました。

### 地域の医療機関から見た 東北大学病院との 連携状況と 今後の課題や改善点

総会に続いて行われたのは、「連携医療機関からみた東北大学病院」をテーマにした座談会。地域医療連携センター青木正志センター長と東北大学大学院医療管理学分野藤森研司教授が司会を務め、仙台市立病院長の奥田光崇氏、東北公済病院長の仁尾正記氏、一番町きまクリニック院長の木島稜二氏、土橋内科医院長の小田倉弘典氏と意見を交わしました。

年間300通、東北大学病院と双方向情報のやりとりをしている仙台市立病院。奥田氏は「それだけ医師同士の連携が密だと言えるのではないかと思います」と話します。医師や連携室からの意見によると、同じ診療科同士の連携は非常に良い一方で、専門科ではない科に紹介する場合の連携がうまく取れない場合があるとのこと。救急の現場からは、外来の応需と入院治療科が異なることでの不便がある、救急外来と入院病床がうまく連携していないという意見もあったといいます。

「病院同士で連携を強めることで、医療圏の中でより多くの患者を円滑に応需できる可能性が高まるのではないかと期待しています。東北大学病院は最後の砦だと、われわれ市中病院は思っていますので、難しい患者さん、病態不明の患者さんや重症の患者さんの応需もお願いできれば」と奥田氏。

両院は人事交流も盛んであることから、「多くの優秀な医師を派遣していただきありがとうございます、というのが第一です」と感謝を述べた上で、「派遣に当たっては研

修医の指導も一つのミッションとして与えていただければ」と提案。ほか、働き方改革に伴う直営の派遣に対する懸念点なども伝えました。

仁尾氏は、東北公済病院が一般病棟の急性期を主体に地域の患者さんの紹介を多く受け、その中から当院に年間1000人ほどを紹介していることを説明。一方で高度急性期の患者さんの状態が落ち着いた段階で、回復期の病棟に引き受けており、当院からは年間300人以上の患者さんの紹介を受けています。

「地域の施設や機関から患者さんを引き受け、さらにその患者さんの求める状態に応じていろいろな病院に紹介するハブ機能が東北公済病院の一つの大きな役割と考えています。そういう意味でも、仙台の中心部にあることにも大きな意味があると思っています」と仁尾氏。「地域の皆さまから信頼されて、安心して選択される病院を目指しています」と力を込めます。

### 双方向で 情報提供を盛んにし 紹介のハードルを下げて 地域でより信頼される病院に

続いての発表は一番町きまクリニックの木島氏。気仙沼市で木島医院として開設した同院は東日本大震災で被災し、翌2012年に仙台市一番町で移転開業しました。乳がんの針生検での発見が年間120例前後で、約半数の患者さんを当院に紹介しています。連携に関しては、当院が乳がん確定患者さんの予約枠を確保していることについて、「比較的早くご紹介できる体制を取っていただいていますので、患者さんは本当に助かっています」と感謝を口にします。



「がっかりして帰られた患者さんが、東北大学病院に行くと心のケアも含めいろいろな方がチーム医療でサポートしてくれることで明るくなって、『紹介してくれてありがとうございます』と言ってくれたことがありました」とも。治療計画について担当医師から手紙が届き、逆紹介で術後の患者さんなどの経過を同院で見るなど、連携の良好さも紹介しました。

最後は土橋内科医院の小田倉氏。東北大学病院から歩いて10分ほどの場所にある同院では1年間で84人、1週間に1~2人を各科に紹介しています。小田倉氏は当院との連携について、事前に青葉区内の医師にヒアリングした結果を報告しました。紹介状を当日ファクスで送るケースにおいて当初は患者さんを待たせることも多かったやりとりがスムーズになってきた一方、当院内でさらに別の科に紹介された場合に、その後の情報が途絶えることがあるという指摘も。

また、東北大学病院の各科の医師が各診療所の特性を把握しているか疑問があったとした上で、「むしろ我われ開業医の組織が、そうした情報提供を大学の先生にしてい

くべきではないかという話になりました」と続けます。「東北大学病院への紹介は我われにとってハードルが高いことでしたが、少しずつ取り払われてきたと思います。まだ安易には紹介できない感じもありますが、今日のような場で、双方向で情報をキャッチボールすることが非常に大事」と訴えました。

その言葉を受け、東北大学病院に紹介することに対するハードルや課題について、残りの時間で意見を交わした登壇者の皆さん。進行役を務めた青木センター長が「大変良いサジェストをいただき、ありがとうございます。東北大学病院としてもハードルを下げてはいるつもりですが、より気持ちよく紹介していただけるような病院を目指していきたいですし、すぐにお返事や報告をして信頼される病院になっていきたい」と締めくくりました。



## 認知機能外来を開設しました

近年、高齢者人口の増加とともに認知症患者さんの増加が懸念され、一方で新規のアルツハイマー病治療薬が開発されるなど、認知症の予防や早期発見・早期治療の重要性が高まっています。これまで東北大学病院における認知症疾患の診療は各科個別に行っていましたが、このように新たな段階に入ってきた認知症診療へ対応する必要が出てきたため、2023年4月より東北大学病院として「認知機能外来」を新たに開設いたしました。認知症と言ってもアルツハイマー型認知症やレビー小体型認知症、あるいは正常圧水頭症や老年症候群などによる認知機能低下など多彩な病態があり治療法も異なるため早期に正確な診断を行うことは重要です。また認知症ではもの忘れに関係する記憶だけでなく、注意や言語、視空間認知など様々な認知機能の障害が見られます。「認知機能外来」では、認知症の疑いがある方のみならず、もの忘れを自覚されている方や認知機能の低下を心配している方なども対象に詳細な診察と精密な検査を行い、認知症の予防・早期発見・早期治療・予後改善に取り組んでいます。どうぞお気軽にご紹介下さい。

毎週、月・火・水・金で加齢・老年病科と高次脳機能障害科の医師が担当します。診察申し込みは従来の申込用紙で可能です。紹介目的の項に「認知機能外来受診希望」と書いて頂くだけで大丈夫です。もしご希望の診療科がある場合には希望する診療科名を付記して下さい。

認知症の発症予防や的確な治療などを通して患者さんとご家族のための医療を提供してまいります。「認知機能外来」を地域医療にお役に立てただけでしたら幸いです。



左：高次脳機能障害科 鈴木 匡子 科長  
右：加齢・老年病科 中瀬 泰然 科長

## ジェンダー医療センターを設置しました

生物学的な性と、自認する心理的・社会的な性が一致しない状態の人がいることが知られています。このような状態はその人に強い苦痛を感じさせ、また、社会生活に障害を引き起こすことから「性同一性障害」という診断名で定義されてきました。しかし、近年、疾患というより特性の多様性として、「性別違和」、あるいは「性別不合」という名称に置き換わってきています。原因として胎児期の生物学的な要因も指摘されていますが詳細は不明です。平成10年、性別違和の身体的治療として自認する性別に身体を適合する性別適合手術が本邦で初めて公に施行され、平成16年、「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」が施行されたことによって、性別不合をもつ人が性別適合手術の実施を含む一定の条件のもとで戸籍の性別を変更できるようになりました。性別不合を有する人の正確な頻度は不明ですが、成人男性の3万人に1人、成人女性の10万人に1人が性別適合手術を望んでいると推定されています。

日本精神神経学会によって策定されたガイドラインに沿って性別不合の身体的治療を行う医療機関が各地にあります。東北地方はこの医療体制の空白地域でした。この地域格差を改善すべく、東北大学病院の精神科、形成外科、産婦人科、泌尿器科の間で意見交換を重ね、東北大学病院ジェンダー医療センターが設置されました。当院単独で全ての診療が可能になるまでにはもうしばらく時間を要しますが、当面、先行する医療機関からのサポートを得ながら診療体制の整備拡充を図ってまいります。



ジェンダー医療センター センター長  
富田 博秋

ジェンダー医療センターWEBサイト  
<https://www.hosp.tohoku.ac.jp/departments/d3339>



# 診療科再編のお知らせ

## リハビリテーション科統合により、 リハビリテーション医療の質の向上を目指します

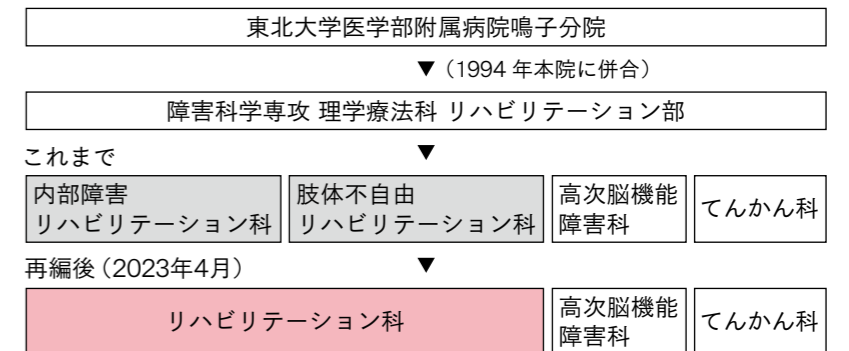
当院のリハビリテーション診療は1994年の東北大学医学部附属病院鳴子分院が本院に統合されて以来ずっと、主として肢体不自由リハビリテーション科および内部障害リハビリテーション科の2科により行われてきました。この肢体不自由、内部障害という言葉は身体障害者福祉法に定められている身体障害者手帳の分類であります。その違いがわかりづらいと以前から指摘されてきました。さらに近年の超高齢社会においては障害は一つでなく、肢体不自由と内部障害の重複障害が普通のこととなってきました。そこで今回、当院のリハビリテーション診療について内外にわかりやすく示すために、肢体不自由リハビリテーション科と内部障害リハビリテーション科を統合して一つのリハビリテーション科とすることになりました。

このリハビリテーション科統合により、リハビリテーション診療がわかりやすくなるのみならず、すべてのリハビリテーション医療をワンストップで行うことで医師・患者双方にとって大きなメリットがあります。また、療法士たちの所属するリハビリテーション部と一体となった運営が可能となり、病院の潤滑油であるリハビリテーション診療の飛躍的な効率化が期待できます。さらに、専攻

医の一貫したリハビリテーション科専門医教育が可能となり、当院のリハビリテーション医療の質の向上に大きく貢献するものと考えています。新しく生まれ変わったリハビリテーション科を、どうぞよろしくお願いたします。



### リハビリテーション科の変遷



## 内科再編により、医師の幅広いキャリア形成を実現します

当院はこれまで、内分泌疾患の診療について腎・高血圧・内分泌科で診療を行っておりましたが、4月より腎・高血圧・内分泌科は腎臓・高血圧内科に、糖尿病代謝科は糖尿病代謝・内分泌内科となります。

再編の背景として、新専門医制度において糖尿病・内分泌専門医がサブスペシャリティの資格となっており、専門医教育・人材育成において再編の必要性がありました。

また、研究・診療の近接性から、多くの大学で糖尿病・内分泌で講座を構成していることも理由として挙げられます。糖尿病・内分泌として診療・人材育成を行うことにより医師の幅広いキャリア形成、地域医療への貢献が可能となると考えられます。

### 内科診療科再編内訳

〈これまで〉	〈再編後 (2023年4月)〉
腎・高血圧・内分泌科	腎臓・高血圧内科
糖尿病代謝科	糖尿病代謝・内分泌内科
循環器内科	循環器内科
消化器内科	消化器内科
呼吸器内科	呼吸器内科
血液内科	血液内科
リウマチ膠原病内科	リウマチ膠原病内科



## セミナー情報

### 「がんと診断された時からの緩和ケア」市民公開講座を開催

2023年3月4日(土)にYouTubeを用いて「がんと診断された時からの緩和ケア」市民公開講座を、宮城県および同県がん診療連携協議会緩和ケア部会の共催で開催しました。

当院緩和医療科 井上彰教授が司会を務め、宮城県立がんセンター 緩和ケア内科 武田郁央氏、当院緩和医療科 田上恵太講師、がん患者会・サロン ネットワークみやぎ 副代表 阿部佐智子氏が講演を行いました。テーマである「がんと診断された時から緩和ケアというサポートを受けられるということ」とともに、「病気や老いにより介護が必要になる日のために今から出来る生活の準備」や「病気でも自分らしく生きるための、患者が望む緩和ケア」についても広く取り上げ、90分にわたってお伝えしました。

宮城県は古くから緩和ケア病棟・ホスピスケア、在宅医療・緩和ケアが盛んであり、近年は治療の副作用対策などを担うサポーターケアや気持ちのつらさや精神疾患が病気に罹患された際のサポートにあたるサイコオンコロジー

といった分野も発展してきています。病気になっても安心して治療を受けれる医療の提供体制と共に、安心して生きていける地域になるように、緩和ケアも尽力してまいります。



本講座のアーカイブ動画をこちらからご覧いただけます。

<https://youtube.com/live/F40p5Qhz0Is>



## 読者のみなさんの声

今回、地域医療連携協議会にて広報誌「with」についてのアンケートを行いました。寄せられたご意見・ご感想の一部をご紹介します。

### 〈今後とりあげてほしいテーマ〉

- 病理学や法医学など基礎系の学科の活動紹介
- 地震などのこれから起こる災害に備えるコーナー
- 地域で連携している現場の医師との座談会
- 患者さんや多職種の方も入った座談会

### 〈ご意見〉

- 診療科紹介、セミナー情報、座談会など、盛り沢山の内容でいつも楽しく読ませていただいています。
- もう少し文字が大きいと高齢の方にも読みやすいかもしれません。

### ご意見募集中

当院との医療連携に関するご意見・ご質問を募集しています！患者さんをご紹介いただく際に困っていること、伝えておきたいことなどを下記フォームよりお寄せください。



ご意見・ご質問をお寄せいただいた方にhessoオリジナルA5クリアファイル等をプレゼント！



〈投稿フォーム〉

<https://forms.gle/QcKeUaRyc9BSxjFQ7>

ご意見・ご感想をお寄せいただいたみなさま、ありがとうございました！読者の方の役に立つ広報誌を目指して、今後の情報発信の参考にさせていただきます。

## INFORMATION

### NHK「病院ラジオ～東北大学病院編～」が放送されました



当院を舞台に収録されたNHKドキュメンタリー番組「病院ラジオ～東北大学病院編～」が放送されました。サンドウィッチマンのお二人が一日限りの出張ラジオ局を開設し、患者さんやご家族の本音をリクエスト曲とともに聞いていく番組です。

〈番組公式サイト〉

<https://www.nhk.jp/p/hospital-radio/>



### スポーツ展示コーナーをリニューアルしました



東北大学病院は、県内を拠点に活動するプロスポーツチームやスポーツを楽しむ全ての方を応援しています。2月18日、ホスピタルモールのスポーツ展示コーナーをリニューアルしました。

東北楽天ゴールデンイーグルス様、ベガルタ仙台様、仙台89ERS様から寄贈いただいたサイン入りボールやバットなど、さらに昨年夏の全国高等学校野球選手権大会で優勝した仙台育英高等学校 硬式野球部様より寄贈いただいた監督メッセージ入りユニフォームや優勝記念品を展示しています。ご来院の際はぜひご覧ください。

### SpringX超学校 × 東北大学病院 特別講座開講



3月31日、東北大学病院と一般社団法人ナレッジキャピタルは、共催でSpringX超学校「人生100年を生きる～愛し(医と歯)が支えるあなたの健康寿命～」特別講座をYouTubeにて生配信しました。SpringX超学校は、イノベーション人材を育成するために、幼児から大人まで幅広い年齢の方がさまざまな分野のスペシャリストから「本物の知」を学べるナレッジキャピタルオリジナルプログラムです。顎口腔画像診断科科長 飯久保正弘教授、耳鼻咽喉頭・頭頸部外科科長 香取幸夫教授が登壇し、口と全身との関係についてわかりやすく解説するとともに、東北大学病院が行っている愛し(医と歯)の連携について紹介しました。

### 国立大学附属病院医療安全管理協議会総会を開催しました



2022年10月20日、21日の2日間、仙台国際センターで第36回国立大学附属病院医療安全管理協議会総会を東北大学病院の主幹で開催しました。この会は全国の国立大学病院の医療安全関係者が一堂に会し、医療安全に関する課題や取り組みを共有する非常に重要な会です。特別講演では東京工業大学副学長 上田紀行先生に「『支え』と『自由』危機における病院と世界の救いについて」をご講演いただき、パネルディスカッションでは宮城県と東北大学病院が協力して行った新型コロナウイルス感染症対応について報告しました。その他各種委員会や部会でも活発な議論が繰り広げられ、今後の医療安全活動に非常に有意義な会となりました。

# 表紙のはなし

今号の表紙写真は、県立宮城病院旧正門前にて撮影を行いました。東北大学病院の前身である県立宮城病院が1911年3月に現在地（東北大学星陵キャンパス）に移転・竣工した時に建てられた煉瓦造りの正門が病院南側に当時の様子そのまま復元されています。周辺は、2018年に東北大学病院百周年記念庭園として整備され、東北大学病院の歴史に思いを馳せる散策路となっています。



## 新患に関する変更のご案内

### 内科再編のお知らせ

腎・高血圧・内分泌科／糖尿病代謝科では、令和5年4月より内科診療科再編を実施いたしました。  
腎・高血圧・内分泌科は【腎臓・高血圧内科】、糖尿病代謝科は【糖尿病代謝・内分泌内科】となります。

【腎臓・高血圧内科】新患日：月～金（完全予約制、祝祭日・年末年始を除く）  
【糖尿病代謝・内分泌内科】新患日は疾患によって異なります。（いずれも完全予約制、祝祭日・年末年始を除く）  
糖尿病：火・金／内分泌：月・水・金

### リハビリテーション科統合のお知らせ

肢体不自由リハビリテーション科と内部障害リハビリテーション科は統合となり、  
令和5年4月よりリハビリテーション科となります。

新患日：月・水・木・金（完全予約制、祝祭日・年末年始を除く）  
完全予約制の診療科は、必ず事前に地域医療連携センターへ予約のお申込みをお願いいたします。

## ウェブマガジン、メールマガジン始めました！

東北大学病院ウェブマガジン「iINDEX」を開設しました。当院独自の取り組みや医療に携わる人物のインタビュー、簡単にできるエクササイズなどのコラムやお役立ち情報を定期的にお届けいたします。さらにメールマガジンも開始しました。ぜひ、ご登録ください。配信をご希望の方は下記よりご登録（無料）いただけます。



〈ウェブマガジン〉

**iINDEX**



〈メールマガジン〉

月1回配信〈不定期〉

<https://www.hosp.tohoku.ac.jp/webmagazine/>



東北大学病院

みんなの未来基金

新しい治療法や医療機器を開発し、未来型医療をリードすることで、明るい未来をつくりたいと考え、「東北大学病院みんなの未来基金」を創設しました。皆さまからの温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

<https://www.hosp.tohoku.ac.jp/kikin/>



## 編集後記

今号の特集は新体制紹介と地域医療連携協議会レポートの2本だてです。2月に開催した地域医療連携協議会では、3年ぶりに地域の医療機関の皆さまと対面で意見を交わすことができ、広報誌「with」についてのご意見・ご感想もお寄せいただきました。ご意見・ご感想をお寄せいただいた皆さま、ありがとうございます。今後の情報発信の参考にさせていただきます。4月より新体制となった東北大学病院を今後ともどうぞよろしくお願いたします。（広報室 福本）

with  
第54号2023年5月発行

東北大学病院 地域医療連携通信「ウィズ」編集・発行：  
東北大学病院広報室／デザイン：akaoni／撮影：志鎌康平／©東北大学病院／本誌に掲載されている内容の無断転載、転用及び複製等の行為はご遠慮ください。

お問い合わせ 東北大学病院 広報室  
TEL: 022-717-7149  
Eメール: pr@hosp.tohoku.ac.jp  
URL: www.hosp.tohoku.ac.jp

